The Bulletin of Seisa Dohto University
No.7, 359－367, 2026

実践報告

大学生の児童虐待防止啓発活動
―ディプロマポリシーとの関連性―

吉　江　幸　子・杉　本　大　輔・西　野　克　俊・蝦　名　美　穂

要約

児童虐待防止啓発活動の一環としてオレンジリボン運動による啓発活動を行った。本学の教育プログラム「サブメジャー・プログラム」で開設している「地域共生プログラム」科目として開講した授業実践報告である。この活動が本学のディプロマポリシーとどのように関連づけられるか，学生の社会人としての基礎力育成に効果があったか，学生アンケートをもとに考察と課題をまとめた。

キーワード：児童虐待防止，オレンジリボン運動，ディプロマポリシー

1　はじめに

本学における児童虐待防止啓発活動に関する研究論文は，直近で上原他（2022）の「地域における予防・発見・発信機能のシステム構築への一考察―児童虐待防止活動の実践より（第3報）―研究報告がある。また，上原他（2015）は「大学生の児童虐待への意識変化」と題して2015～2017年の3年間，さらに2018年は「対人援助職のスキル構築への一考察―教育現場の取組みから―」の研究で「学生によるオレンジリボン運動」を取り上げる等毎年研究を積み重ねており，いずれも社会福祉学科生を対象とした研究報告である。

本研究では，本学の特徴的な教育プログラムである「サブメジャー・プログラム」内で開講し，他学科の学生も受講対象とした「児童虐待防止啓発活動」の実践を報告する。

なお，近年，厚生労働省や各自治体策定の手引き等において「児童虐待防止」ではなく「子ども虐待対応」と記され始めたが，本研究では「児童虐待防止」と表現する。

2　研究目的

本学の特徴的な教育プログラムとして，2021年度以降の入学生よりメジャー・プログラム（主専攻）・サブメジャー・プログラム（副専攻）が取り入れられた。入学後に所属した学科の科目を履修（メジャー・プログラム）することで専門性を磨くだけでなく，主専攻の枠を越えて学ぶことができる。資格取得に特化した科目や他学科履修によって知識を拡大することも可能となる。学びを自由に深めたり視野を広げることで複数の専門知識をもつ，いわばプラスαの人材育成につながる。

この発想は，大学設置基準改正（2018）においても主専攻・副専攻・ダブルメジャーの具体的基準が明記され，工学分野を中心とした課程設計の際の義務化となっているが，工学以外にも努力義務として制度の導入が進んだ経緯がある。

本学では，卒業要件として一つ以上のサブメジャー・プログラムを履修する必要がある。

今回の児童虐待防止啓発活動は，このサブメジャー・プログラムで開設している「専用プログ

ラムタイプ」の「知識・視野拡大型」８講座中の「地域共生プログラム」科目として開講した。地域共生プログラムは学科の枠に関係なく開講が可能であり，全学生を対象として，通常の授業時間以外で開講される。受講後は共通教育科目１単位取得となる。

従って今回も受講募集は学年学科を問わず周知し，31 人が受講した。受講後に実施したアンケートから本学のディプロマポリシーとどのように関連するかを考察する。

本学のディプロマポリシーは各学部の学位授与に関連した基本事項があるが，大学としては以下の能力，知識及び態度等が身についていることを保証するものである。

１．すべての人々が共生する社会の実現に資する意志や態度。
２．すべての人々が共生する社会の基盤となる専門分野における知識，技能およびこれらを実践的に活用する能力。
３．すべての人々が共生する社会で必要となる教養。
４．課題探求能力をもって自ら問題を発見し，論理的に思考し，解決に導く態度。
５．身のまわりや地域にある様々な問題に関心を持ち，自己の意見を的確に表現するとともに，自らの責任を自覚し，問題解決のためにすべての人々と協働することができる態度。

３　研究方法

地域共生プログラム「児童虐待防止啓発活動」は 2025 年５月５日～５月 21 日まで，本学ポータルサイトの案内機能で全学生に周知し，５月 28 日～６月 18 日にかけて講義・演習，６月下旬の大学祭２日間及び 11 月上旬に３日間の日程で北広島市民ギャラリーにおいて啓発活動を実施した。その後，受講した学生を対象に web フォームからアンケート回答を求めた。アンケートは Office365 のアンケート作成ツール Microsoft forms で作成し，学生に配信，回答を得た。

以下，受講時の実践報告とともにアンケート結果を報告する。

４　研究結果

4-⑴　学科・学年別受講数

全学科を対象に開講案内と授業シラバスを周知し，受講申し込みは 31 人であった。学科別では社会福祉学科 14 人，経営学科 10 人，デザイン学科７人が受講，学年別は表１のとおりである。

表１　学科・学年別受講数

	１年	２年	３年	４年	計
社会福祉	8		2	4	14
経営			9	1	10
デザイン			1	6	7

4-⑵　開講内容

地域共生プログラムは 30 時間以上の実施で取得単位は１単位科目である。

担当教員は社会福祉学科教員４人が講義，演習，大学祭，ギャラリー展示を役割分担した。

受講日の決定は，本学の時間割と担当教員の空きコマを調整し，毎週水曜日５，６講目を中心に進捗状況を見て追加開講した。

成果物作成に関する費用は，大学祭に出展することから大学祭実行委員会から支給される活動費の範囲内で対応した。

以下，開講内容について報告する。

ア．講義編

〇児童虐待に関する講義：以下４項目について資料を配付し講義した。

・児童虐待の定義と４類型の説明
・児童虐待防止に関する法律
・厚生労働省発表の虐待件数の紹介
・主な加害者についての解説

〇オレンジリボン運動に関する講義：スライド説明し，資料は PDF データ化して Microsoft teams

内からダウンロードできるよう設定した。講義内容は，以下のとおりである。

・こども家庭庁ホームページの活用
・児童相談所につながる電話相談ダイヤル 189（イチハヤク）
・児童相談所につながる無料通話アプリケーション・ライン（line）
・児童虐待防止運動のシンボル「オレンジリボン」の発祥
・認定 NPO 法人児童虐待防止全国ネットワークの活動説明

イ．演習編

〇啓発ポスター作成：講義内容をポスター化する際，ポスターとしての見やすさ・内容のわかりやすさを重視するよう説明し，グループ内でデザインを話し合いながら作成した。ポスターは「虐待の定義に基づく類型」2 枚，虐待の相談件数と実態，虐待の要因，オレンジリボン運動とは，虐待防止の取組み」計 6 枚作成した。（各学科 2 グループ体制）

〇オレンジリボン缶バッチ作成：啓発活動の一環として大学祭，市民ギャラリーで配布するため，個々のデザイン（手書き，データ作成いずれも可）によるオリジナル缶バッジを 1 人 5 個作成した。

ウ．啓発活動

〇大学祭：2025 年 6 月 28 日，29 日に大学 2 号館指定場所おいてポスター展示と学生による説明，缶バッジ配布，児童虐待防止ネットワーク オレンジリボン運動への募金活動を展開した。

これらの活動は，大学祭に参加した児童文化研究部の縁日出店と合同開催とし，射的や輪投げ等縁日を楽しむ来場者にポスター展示への誘導，さらに缶バッジ配布や募金を呼びかけた。2 日間で約 400 人がこのコーナーに足を運んだ（来場カウントはしていないが，縁日ゲームの売り上げによる概数である）。

募金は 2 日間で 15,015 円集まり，7 月，認定 NPO 法人児童虐待防止全国ネットワーク宛に「星槎道都大学オレンジリボン運動チーム」名で送金した。同法人ホームページに寄付紹介が掲載されている。

〇市民ギャラリー展示：2025 年 11 月 5 ～ 7 日の 3 日間，北広島市庁舎市民ギャラリー（北広島市中央 4 丁目 2 - 1 北広島市役所 5 階）において児童虐待防止啓発活動とポスター展示を行った。この期間は，北広島市保健福祉部福祉総合相談室こども家庭センターと合同でポスター掲示，センター主催の講演会案内周知も兼ねた展示となった。

このギャラリースペースは，いこいの場としてカフェも併設されており，市民や団体が絵画・工芸品等の作品展示会で活用できる無料スペースである。一般市民や市職員の休憩等で賑わうフロアであるが今回の展示は学生・教員とも講義期間のため，案内担当の配置はせず，来場数は不明である。

4-(3) 学生アンケート結果

通常，大学では各期授業日程終了後に授業改善アンケートを実施する。「地域共生プログラム」においても同様にアンケートを実施した。

アンケート内容は上原他（2020）が研究報告したアンケート内容をもとに，講義・演習，ポスター等成果物及び大学祭等の活動に関して 10 設問で実施し，全日程終了後に受講学生 31 人から回答を得た（回収率 100%）。

以下，アンケートの設問に沿って結果を報告する。

Q1．児童虐待の 4 類型についての認知度

「知っていた」15 人（48%），「今回の授業ではじめて知った」16 人（52%）であり，学科別では表 2 のとおりである。

表２　児童虐待の４類型　学科別の認知度

	人	%	学科別内訳		
			社会福祉	経営	デザイン
知っていた	15	48%	10	2	3
今回の授業ではじめて知った	16	52%	4	7	5

Q2. 児童虐待の４類型を知ったきっかけ
（Q1. で「知っていた」15 人回答）

「テレビやインターネットの情報で知った」７人（46%），「学内で取り組んでいたので知っていた」４人（27%），「授業で学んでいたので知っていた」３人（20%），その他（カッコ内未記入）１人（６%）であった。学科別は表３のとおりである。

表３　児童虐待の４類型を知ったきっかけ（n=15）

	人	%	学科別内訳		
			社会福祉	経営	デザイン
テレビやインターネットの情報で	7	47%	3	1	3
学内で取り組んでいたので	4	27%	4	0	0
授業で学んでいたので	3	20%	3	0	0
その他（未回答）	1	6%	0	1	0

Q3. オレンジリボン運動の認知度

「知っていた」８人（26%），「今回の授業ではじめて知った」23 人（74%）であり，学科別は表４のとおりである。

表４　オレンジリボン運動を今回の授業前から知っていたか

	人	%	学科別内訳		
			社会福祉	経営	デザイン
知っていた	8	26%	7	0	1
今回の授業ではじめて知った	23	74%	7	10	6

Q4. オレンジリボン運動を知ったきっかけ（Q3. で「知っていた」８人回答）

「学内で取り組んでいたので知っていた」３人（37.5%），「テレビやインターネットの情報で知った」１人（13%），「授業で学んでいたので知っていた」１人（13%），「居住している地域活動で知っていた」１人（13%），「その他」は２人（25%）「オープンキャンパスで教えてもらった」「アンビシャス入試の小論文対策で調べていた」と回答した。学科別は表５のとおりである。

表５　オレンジリボン運動を知ったきっかけ（n=8）

	人	%	学科別内訳		
			社会福祉	経営	デザイン
学内で取り組んでいたので	3	36%	3	0	0
テレビやインターネットの情報で	1	13%	0	0	1
授業で学んでいたので	1	13%	1	0	0
居住している地域活動で	1	13%	1	0	0
その他	2	25%	2	0	0

Q5. 児童相談所電話対応ダイヤル「189」の認知度

「知っていた」５人（16%），「今回の授業ではじめて知った」26 人（84%）の回答を得た。学科別は表６のとおりである。

表６　児童相談所電話対応ダイヤル「189」の認知度

	人	%	学科別内訳		
			社会福祉	経営	デザイン
知っていた	5	16%	4	1	0
今回の授業ではじめて知った	26	84%	10	9	7

Q6. 児童相談所電話対応ダイヤル「189」を知ったきっかけ（Q5 で「知っていた」５人回答）

「テレビやインターネットの情報で知った」３人（60%），「授業で学んでいたので知っていた」２人（40%）の回答を得た。学科別は表７のとおりである。

表７　児童相談所対応ダイヤル「189」を知ったきっかけ（n=5）

	人	%	学科別内訳		
			社会福祉	経営	デザイン
テレビやインターネットの情報で	3	60%	3	0	0
授業で学んでいたので	2	40%	1	1	0

Q7. 児童相談所「親子のための相談ライン」認知度

「知っていた」３人（10%），「今回の授業ではじめて知った」28 人（90%）の回答を得た。学科別は表８のとおりである。

表８　児童相談所「親子のための相談ライン」の認知度

	人	%	学科別内訳		
			社会福祉	経営	デザイン
知っていた	3	10%	2	1	0
今回の授業ではじめて知った	28	90%	12	9	7

Q8. 児童相談所「親子のための相談ラインを知ったきっかけ（Q7で「知っていた」3人回答）

「テレビやインターネットの情報で知った」2人（67%），「その他」1人（33%）は「親から教えてもらっていた」と回答した。学科別は表9のとおりである。

表9　児童相談所「親子のための相談ライン」を知ったきっかけ（n=3）

	人	%	学科別内訳		
			社会福祉	経営	デザイン
テレビやインターネットの情報で	2	67%	1	1	0
その他	1	33%	1	0	0

Q9. 今回の「地域共生プログラム」の活動内容の中で自分の学びにつながったこと（選択肢5項目から複数回答）

「児童虐待に関する講義」は31人中28人（90%）が学びにつながったと回答している。次いで「オレンジリボン運動の講義」26人（84%），「大学祭，ギャラリー展示活動」22人（71%），「活動展示用ポスター作成」18人（58%），「配布用缶バッジ作成」14人（45%）であった。学科別は表10のとおりである。

表10　今回の「地域共生」プログラムの活動内容の中で，自分の学びにつながったこと（複数回答）

	人	%	学科別内訳		
			社会福祉	経営	デザイン
児童虐待に関する講義	28	90%	12	8	8
オレンジリボン運動の講義	26	84%	12	7	7
大学祭，ギャラリー展示活動	22	71%	10	7	5
活動展示用ポスター作成	18	58%	9	5	4
配布用缶バッジ作成	14	45%	7	4	3

Q10. 今回の「地域共生プログラム」の良かった点，改善点に関する自由記述（活動時間配分，教員の対応を含む）

受講学生全員の記述を以下に報告する。

①ただ講義を行い議論するのではなく実際にポスターや缶バッジ製作を行う事で参加者の関心をより高めており，デザイン創作にメッセージ性を絡める事が，そこから更に主体的な活動への意欲や議論の姿勢にも繋がっていてとても完成された授業だったと思う。

②地域共生を受けてみて，児童虐待について今まで知らなかったことを詳しく知ることが出来ました。そしてそれを無くしていくために自分たちで考えてポスターを作るという活動を通して，今の世の中児童虐待がなくなっている訳では無いのでこういう小さな活動でも積極的にやって今後児童虐待が減少していくようにしていく活動が大事だと思いました。授業の内容は分かりやすく，とても活動しやすい雰囲気を出してくれていたので授業を受けていて楽しく感じました。児童虐待の事などこの授業を受けてないと知ることがなかったと思うので，貴重な経験になりました。

③とても勉強になりました

④児童虐待について深く考える貴重な機会となりました。ポスター制作の期間も時間が全くないとはならず，しっかり制作していれば完成する時間の長さだったと私は思います。児童虐待問題について，今回日本または一人一人の課題として思うことができました。先生方の対応は素晴らしく，大変感謝しています。改善点としては，どうしようもないことだと思うのですが，やはりオレンジリボンのポスターが出店の賑わいの中にあるのは，互いのメッセージが少し伝わりにくい，または邪魔しあってしまっている部分も否めなかったと思います。また来年，素晴らしい活動ができることを応援しています。

⑤教員も優しく授業や活動をしていてやりやすい環境だったと思います。

⑥活動時間はちょうど良かったと思う。教員の対応もすごく良かった。とてもいい経験になりました。

⑦改善点はなく，全部良かったです。オレンジリボン運動に参加できて良かったです。

⑧特にないです

⑨交流を通じて，貴重な学びと実践の機会を得られ，非常に有意義なプログラムでした。

⑩負担なく終えることができたので，よかった。

⑪先生がいい先生すぎて惚れ込んでしまいました。こう言う先生が増えていけばこの大学ももう少し良くなるのにと心から思いました

⑫地域共生プログラムというよりは，大学の必修科目としての問題だと思いますが，授業外で30時間分の活動を行うのが自分にとってはかなりの負担でした。

⑬もう少し時間が欲しかったです

⑭自分の知らない虐待などを学べたり，オレンジリボン運動ができたきっかけを知れて良かった。

⑮人との触れ合いがとても楽しかったです。特に大人も子供も楽しめるブースに来てくれた子供たちもいい子たちで恵まれた環境で活動できたことを嬉しく思いました。
⑯募金したくなるシステムは良かったと思う
⑰オレンジリボンのバッジは，出店で遊んでくれた人に一つ渡すようにしたら，もっと配れたのかなと思いました。（射的をする前に，オレンジリボンの説明をして渡すなど）
⑱児童虐待の実態やオレンジリボン活動について学ぶことができ，また実際に活動に参加することができたので十分な活動時間だったと思います。教員の皆さんも丁寧でじっくりと指導をしてくださったのでより深く学ぶことができ，また楽しめることができました。
⑲楽しくできた
⑳社会の問題を社会福祉の観点から学び，それを知らない人へと伝える活動をして自分のタメになったし，その人もタメになることなのでとても勉強になった。良かった点としては一人でやるのではなく，仲間と協力してポスター作成をやり，仲間とのコミュニケーションが取れ，より良いポスターに仕上がったこと。活動時間はポスター作成の時間少し短かったように感じた。授業，活動自体の時間はちょうど良かった。教員の方も分からないことがあったら親身に対応してくれてとても嬉しかった。
㉑楽しかったです
㉒どのようにしたら人が集まってどのようにしたら人と上手くコミュニケーションが取れるのかが地域共生を通して自分のためになりました。
㉓楽しかった
㉔この講義で良かったと感じたところは，それぞれの授業時間に応じて，活動時間を変えて，オレンジリボン活動に取り組むことができたところです。ですが，その変更した時間割によって，この講義をとっている学生との意見の出し合いや，別のグループの意見を聞く機会が少なく，学祭での活動で人見知りが出てしまう機会も少なくなかったと感じているので，予め，どのような授業をとるか，どの時間が空きコマになっているのかをアンケートし，なるべく全体で進められるような工夫を出来たら，良いかもと感じました。また，今回の事態が起きた原因が第１クォーターと第２クォーターの間を挟むことによって，そのような事態が起きていたので，どちらかのクォーターで完結できるような仕組みがあったら，やりやすいのかなと感じました。
㉕グループワークでは，普段話さない人と会話ができたり，よりオレンジリボンへの興味関心が湧く内容でとても良いと思いました。
㉖グループでの制作がスムーズに行えていたので良かったです
㉗授業内でのポスターの作成や学祭の手伝いなど全て楽しかったです。先生方も優しく対応してくださり楽しく活動ができました。
㉘現代における児童虐待の詳細について詳しくしれた点，そして児童虐待を防止するという活動に今回のプログラムを通じて貢献できた点が良かったと思います。
㉙講義を通して，オレンジリボンについて理解を深めることが出来たのと，ポスターなどを作成し，北広島市民の方に知って貰う機会があったのが良かったと思う。
㉚授業のテンポが良かった
㉛最初の授業で，教員からわかりやすく教えていただいたおかげで，活動が取り組みやすかった。また，体調を崩して大学祭に行けなかったが，市役所展示に行けば単位がもらえるのがとてもありがたかった。

5　考察と課題

5-⑴　授業内容に関する考察と課題

Q1．Q2．で児童虐待の４類型の認知度を質問したところ，受講学生の約半数が「知っている」と回答し，媒体はテレビやインターネットであった。一方学科別では，社会福祉学科は授業や学内の取組みによる認知度が高いことが分かった。子どもの福祉も学ぶ学科の特徴の表れであろう。

Q3．Q4．では，虐待防止啓発活動の一環として取り組まれているオレンジリボン運動の認知度について質問した。

上原他（2020）が当時の社会福祉学科２年生36人を対象に実施したアンケートでは，オレンジリボン運動を授業前から「知っていた」学生は27人（75％）であったが，今回のアンケートでは「知っていた」学生が８人（26％）であり，１人を除いて全員が社会福祉学科であった。「今回の授業ではじめて知った」が23人（74％）であり，学科内訳で示すと経営学科10人，デザイン学科６人が回答，「はじめて知った」23人のうち70％は社会

福祉学科以外の学生である。

社会福祉学科が取り扱う授業内容の特性が明確であることがわかる。

Q5.～Q8. も児童虐待防止啓発活動の取組みであるが，児童相談所への相談ダイヤル 189 及び相談ライン（line）の認知度は受講学生 31 人のうち 10～16％にとどまっていることがわかった。

Q9. では，学びにつながった授業内容について複数回答で選択する質問である。どの授業も学びにつながった割合は高いが，缶バッジ作成は各自持ち帰りの課題となったことから，学生にとって負担感の増幅につながったと考えられる。

以上，Q1.～Q9. の回答結果から「児童虐待」に関する知識はテレビやインターネット，授業を介して得ることができるが，虐待防止の取組みに対する認知度は低く，学生の 80％以上が地域共生プログラムの受講により取組みを知ったことになる。Q10. ㉒㉘㉙に記述があるように，プログラムへの参加によって，人の集め方や接し方，市民への啓発方法，貢献できた実感や学びになったと実感する記述がみられたことは，本学のディプロマポリシーにある「すべての人々が共生する社会の実現」「すべての人々が共生する社会の基盤」「知識を活かして課題解決力を身につける」「問題解決のための協働」等 1.～5. に関する知識の獲得に役立ったと考える。

5-⑵　授業日程に関する考察と課題

開講日程は，本学の第 1，第 2 クォーターの時間割と担当教員の空きコマを調整し，毎週水曜日 5，6 講目を中心に開講した。6 月上旬の第 1 クォーター終了まではこの時間帯で実施できたが，第 2 クォーターに入ると学生によっては主学科の授業と重なり，別日程で開講した。Q10. ㉔にも意見として記述があったとおりである。

当初教員間でポスター作成のグループについて検討したが，学科混在だと時間割の違いがあるため学科別で取り組んだ。他学科との交流と言う意味では，講義・演習時には薄い印象だが，Q10. の意見・改善点では交流ができて良かったとの記述が複数あることから，同学科であっても学年が混在していたことで交流の機会が得られたと考える（⑨⑮⑳㉒㉕）。

オレンジリボン運動のリボン作成に際し，上原（2016）は布リボンやオレンジ色画用紙を紐状にカットして作った。今回は持ち歩きや飾ることができるよう缶バッジにし，リュックやトートバッグ，ペンケースなどにつけることを想定した。ポスター作成に時間がかかり，缶バッジ作成が難しいグループもあったため，各自持ち帰りとなったことは今後の課題でもある。作品発表の場があれば自身のアイディアを人に伝え合うことができ，自己表現力の向上にもつながるだろう。実際，ポスター発表を行ったが，他グループの表現方法を認め合う姿がみられた。

11 月はこどもまんなか月間（こども家庭庁）であり，北広島市として 2025 年 10 月に開設したこども家庭センター主催の記念講演が 11 月 29 日に開催されたことから，その告知も兼ねた合同展示となった。当初 1 週間程度の展示期間を考えていたが，本学の後期時間割確定時の予約で 3 日間を押さえるだけになったことは今後の検討課題である。

一方で，卒業に必要な単位の開講とあってサブメジャー・プログラム未履修の 3，4 年生も目立った。受講目的に関する質問項目は設定していないため，推測の域を出ないが Q10. の自由記述からは，楽しくテンポよく学んだと読み取れる文面が多い。履修科目が多い学生にとっては時間割外で 30 時間の確保が負担になるとの意見もあり，サブメジャー・プログラムの意義説明と特徴的教育プログラムの定着は，大学の教学マネジメントの課題となろう。

6　おわりに

本研究は，児童虐待防止啓発活動の一環としてオレンジリボン運動による啓発活動を「地域共生プログラム」科目として開講した。さらにこの活動を，本学のディプロマポリシーと関連づけて考

察した。

学生達は教室内の講義・演習で得た知識を，大学祭等人が集まる場所で実践的に活用する体験をした。あくまでも体験でありその能力がすぐに身につくとは考えにくいが，契機とはなり得る。他のサブメジャー・プログラムにも興味関心をもって履修することで，専門分野プラスαの人材として地域社会へ貢献できるであろう。

さらに踏み込んだ調査とするならば，西道（2011）のキャリア教育プログラム効果測定に関する尺度によって「社会人基礎力の測定」を試みることも必要であろう。

〈参考文献・参考資料〉

廣川佳子・大嶋玲未・宮崎弦太・芳賀繁（2016）．大学生の社会人基礎力における因子不変性の検討．立教大学心理学研究 58，pp1-11.

松尾由美（2016）．オレンジリボン運動への参加は児童虐待への理解を深めるか―「教育・保育相談支援」の受講生を対象として―．関東短期大学紀要（58）pp1-6.

西道　実（2011）．社会人基礎力の測定に関する尺度構成の試み．プール学院大学研究紀要（51），pp217-228.

認定特定非営利活動法人児童虐待防止全国ネットワーク https://www.orangeribbon.jp/individuals/list.html（2025.9.1）

大熊信成（2017）．児童家庭福祉制度と学生による児童虐待防止運動（オレンジリボン運動）の取り組み．佐野短期大学研究紀要（28）pp.117-126.

上原正希・飯浜浩幸・小早川俊哉・杉本大輔・湯浅頼佳・吉江幸子・櫻井美帆子・大島康雄（2017）．大学生の児童虐待への意識変化：オレンジリボン活動の調査から（第３報）．道都大学紀要（42）pp.1-6.

上原正希・飯浜浩幸・小早川俊哉・西崎毅・藤根収・杉本大輔・櫻井美帆子・大島康雄・吉江幸子・湯浅頼佳・西野克俊（2022）．地域における予防・発見・発信機能のシステムへの構築への一考察―児童虐待防止活動の実践より（第３報）―．星槎道都大学研究紀要第３号 pp55-60.

宇野耕司（2020）．大学生による児童虐待防止啓発運動の実践報告―社会人基礎力の育成に有効か―目白大学心理学研究 17，pp11-29.

Child Abuse Prevention Awareness Activities by University Students

— Relatedness to Diploma Policy —

YOSHIE Sachiko　SUGIMOTO Daisuke
NISHINO Katsutoshi　EBINA Miho

Abstract

We presented a practical report on awareness-raising activities for the prevention of child abuse through the Orange Ribbon Campaign. The course was titled "Community Coexistence Program," which is one of the sub-major programs offered at Seisa Dohto University. We examined how this activity relates to the university's diploma policy. Furthermore, we considered whether it contributed to fostering students' fundamental skills as members of society. Using student questionnaires, we compiled a comprehensive analysis and summarized the challenges.